



<https://surala.co.jp>

IMPACT MANAGEMENT REPORT 2024

2024年度活動報告書



近年、少子化が進む一方で、不登校や発達障がい、家庭の経済的困難など、子どもたちを取り巻く課題はますます複雑化・多様化しています。その影響により教育格差は深刻さを増し、従来の画一的な教育から、子ども一人ひとりに寄り添う多様な学びへの転換が求められています。こうした状況に対し、私たちはテクノロジーを活用した新しい学びのかたちを通じて、すべての子どもたちに「学ぶ喜び」と「自信」を届けたいと考えています。

また、文部科学省が推進する「GIGA スクール構想」や「教育 DX」、そして「NEXT GIGA」への移行といった政策の流れの中で、ICTを活用した個別最適な学びへの期待は、これまで以上に高まっています。私たちは、こうした社会的要請に応えるべく、先端技術と教育現場の実情をつなぐ取り組みを重ねてきました。

『インパクトマネジメントレポート』は、こうした私たちの事業が社会にどのような影響を与えているのかを、定性的・定量的な視点から継続的に評価・可視化し、社会的価値を明らかにしながら、より良い事業づくりへとつなげていくためのものです。国内のEdTechベンチャー企業としては非常にユニークな試みであり、第3回となる今回は、当社が注力する4つの社会課題とその周辺環境との関係性を整理した「課題マップ」、社会課題の解決に至るプロセスを示したロジックモデルのアップデート、そしてユーザーを対象に行ったアンケート調査の構造分析を実施しました。

「すらら」の活用を通じて、誰もが自分の可能性を信じられる社会をつくること。それこそが、私たちの目指す未来です。その実現に向けては、行政や学校、教育現場を支える皆様、そして社会全体の連携が不可欠です。

これからも、多くの皆様と手を携えながら、教育を通じて格差のない、希望ある未来をともに築いてまいります。

企業理念とミッション

教育に**変革**を、子どもたちに**生きる力**を。

世の中には、学力や所得、地域の格差などによって十分な教育を受けることができない子どもたちがいます。私たちはそうした子どもたちにも、一人ひとりに合った新しい学習体験を届けます。この学習体験を通じて、子どもたちは「大人になっても役に立つ真の学力」と、「努力すれば結果が出るという自信」を身につけることができます。

私たちはこれらを実現するために、新しい学びの形を、学校や塾、その他の教育機関とともに築いていきます。

インパクトマネジメントとは

持続可能な社会の構築への関心が世界的に高まるなか、企業もその担い手としての役割が求められるようになりました。企業の活動やサービスが、社会・環境に与える影響（インパクト）を意図的に生み出し、その成果を測定・評価・改善していく取り組みを「インパクトマネジメント」といいます。

すららネットが着目する4つの課題

ICT教材「すらら」は、だれでもゼロから自分のペースで学べるという特長から、多くの子どもたちに利用されています。インパクトマネジメントにおいては特に、不登校、発達障がい、低学力、貧困の4つの社会課題に着目しています。4つの課題に対して、事業が目指すアウトカム（成果）とその実現に向けた戦略を「ロジックモデル」※で可視化し、実施状況をモニタリングしています。

※ロジックモデル：ある施策がその目的を達成するにいたるまでの論理的な因果関係を明示したもの



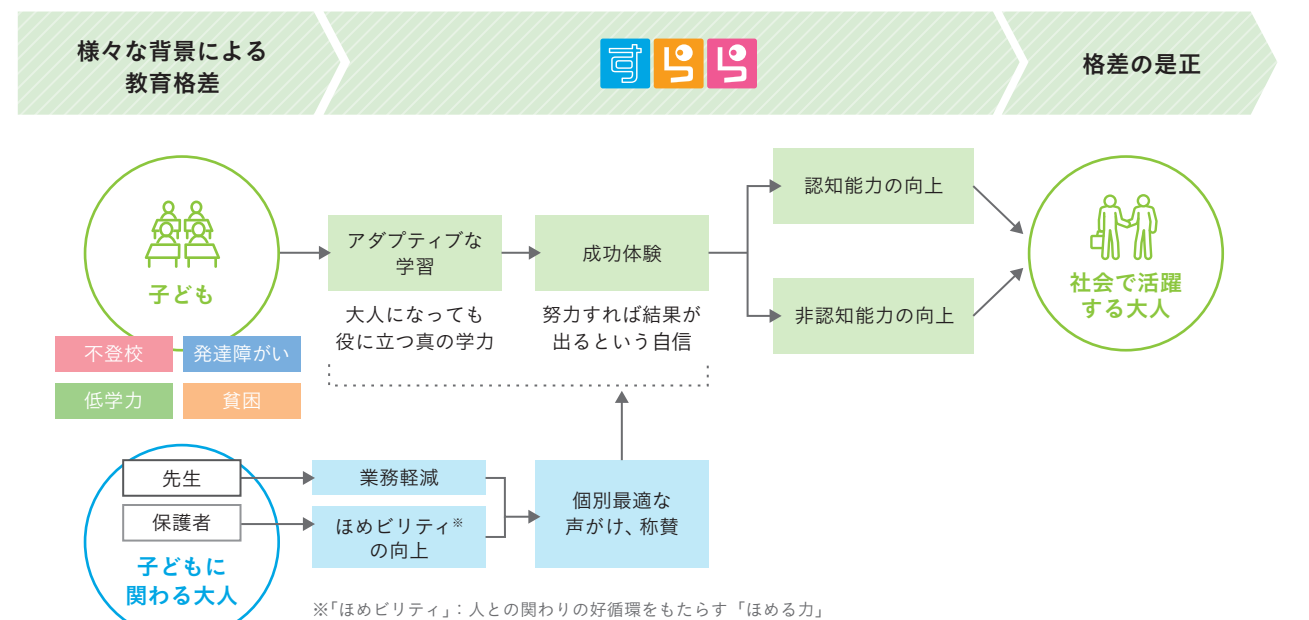
代表取締役 湯野川 孝彦

課題解決へのロードマップ

不登校、発達障がい、低学力、貧困—— 子どもたちを取り巻くこうした困難は、将来にも影響を及ぼし、やがて次の世代へと連鎖する可能性があります。すららネットは、こうした“負の連鎖”を断ち切るために、教育を通じた課題解決に取り組んでいます。

AIを活用したICT教材「すらら」は、子どもたちの「認知能力（＝学力）」と「非認知能力（＝自信や意欲など）」の両方を育むことを目指して設計されています。子どもたちは「すらら」での学習を通じて「やればできる」という実感を得ることで、小さな成功体験を積み重ね、将来の選択肢を広げながら、自立した大人へと成長していきます。私たちは、その一人ひとりの歩みに伴走しながら、社会課題の解決を目指しています。

また、子どもたちを支える先生や保護者へのサポートにも力を入れています。先生には、教務負担の軽減と、学習データに基づく効果的な指導を支援しています。保護者には、子どもへの関わり方や声かけの工夫を学べるサービスを通じて、家庭でも子どもの力を引き出せるよう支援しています。



すららネットが提供するICT教材「すらら」のコンセプト

「すらら」は、子どもたちの勉強に対する「わからない」を「わかった」に、「できない」を「できた」に、「勉強は嫌い」を「勉強って楽しい」にしたいという思いから開発しています。子どもたちが「すらら」の学習を通じて「自分に対する自信」を持てるようになり、将来の選択肢を広げられるようなコンテンツ作りが全教科共通の目的です。

無学年式の学習プロセス、アニメーションキャラクターとの双方向のレクチャー、つまずき分析機能、難易度コントロール機能、ゲーミフィケーション機能など、すべては学ぶ子どもたちを主軸に置いた設計になっています。



すららネットが関わる 子どもにまつわる社会課題マップ

すららネットが子どもに関する社会課題にどのように関わっているかを可視化するため、「すららネットが関わる 子どもにまつわる社会課題マップ」を作成しました。

課題マップとは

課題マップは、社会課題を単に列挙するのではなく、それぞれの課題が相互にどのように関連し合っているかを可視化するものです。

多くの社会課題は単独で発生するものではなく、相互に影響を与え合い、複雑な構造を形成しています。こうした構造を明らかにすることで、課題の背景にある要因を深く理解し、より効果的な解決策の方向性を検討することが可能になります。本マップでは、社会課題が生む「負の循環」に着目しました。すららネットが重点的に取り組んでいる「不登校」「発達障がい」「低学力」「貧困」という4つの社会課題がどのようにつながり、どのような悪循環を生み出しているのかを整理しています。

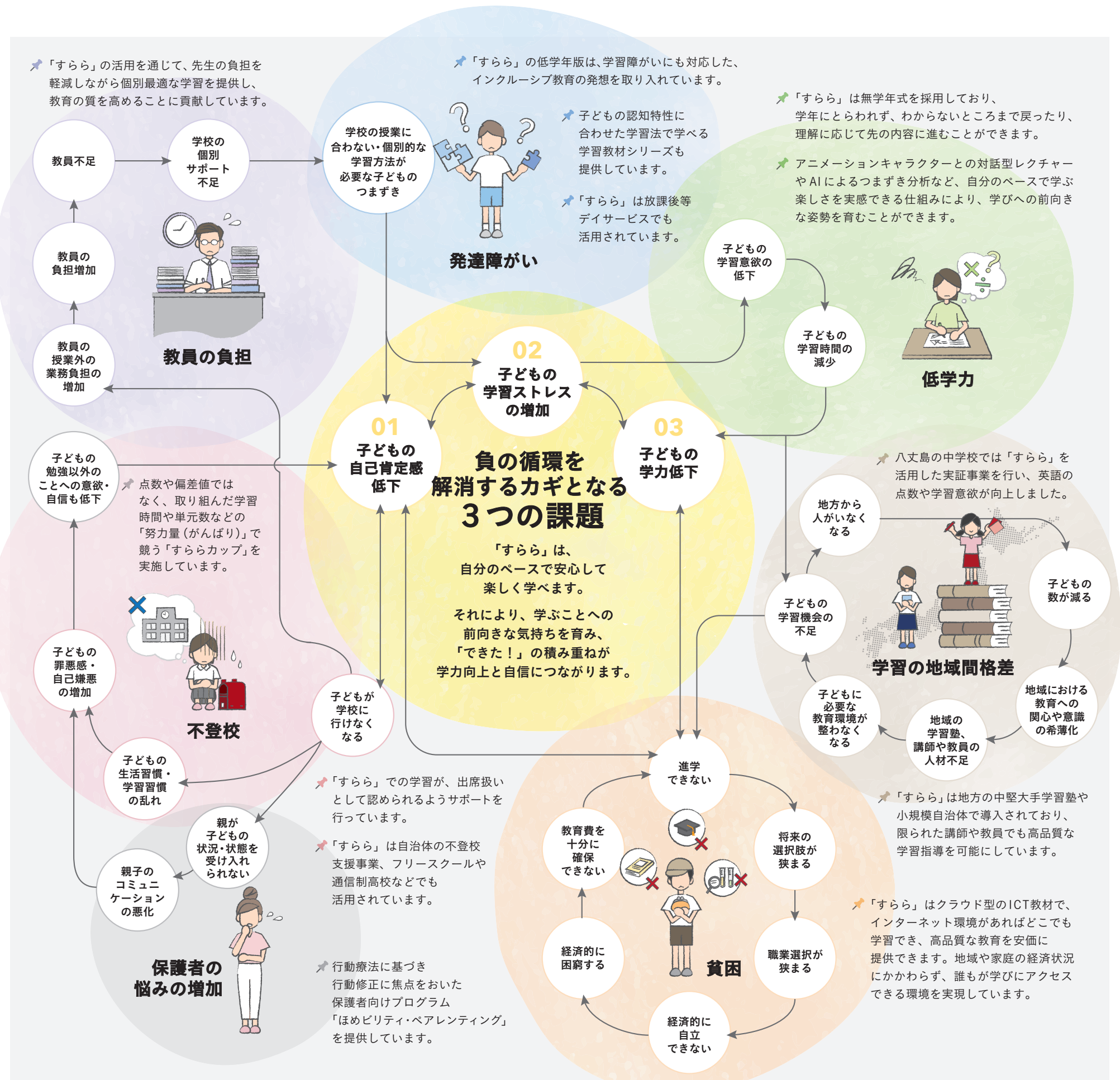
また、各課題に対して、すららネットの事業活動がどのように介在し、どの部分に貢献し得るのかを併せて示すことで、当社の社会的インパクトをより立体的に可視化することを目的としています。

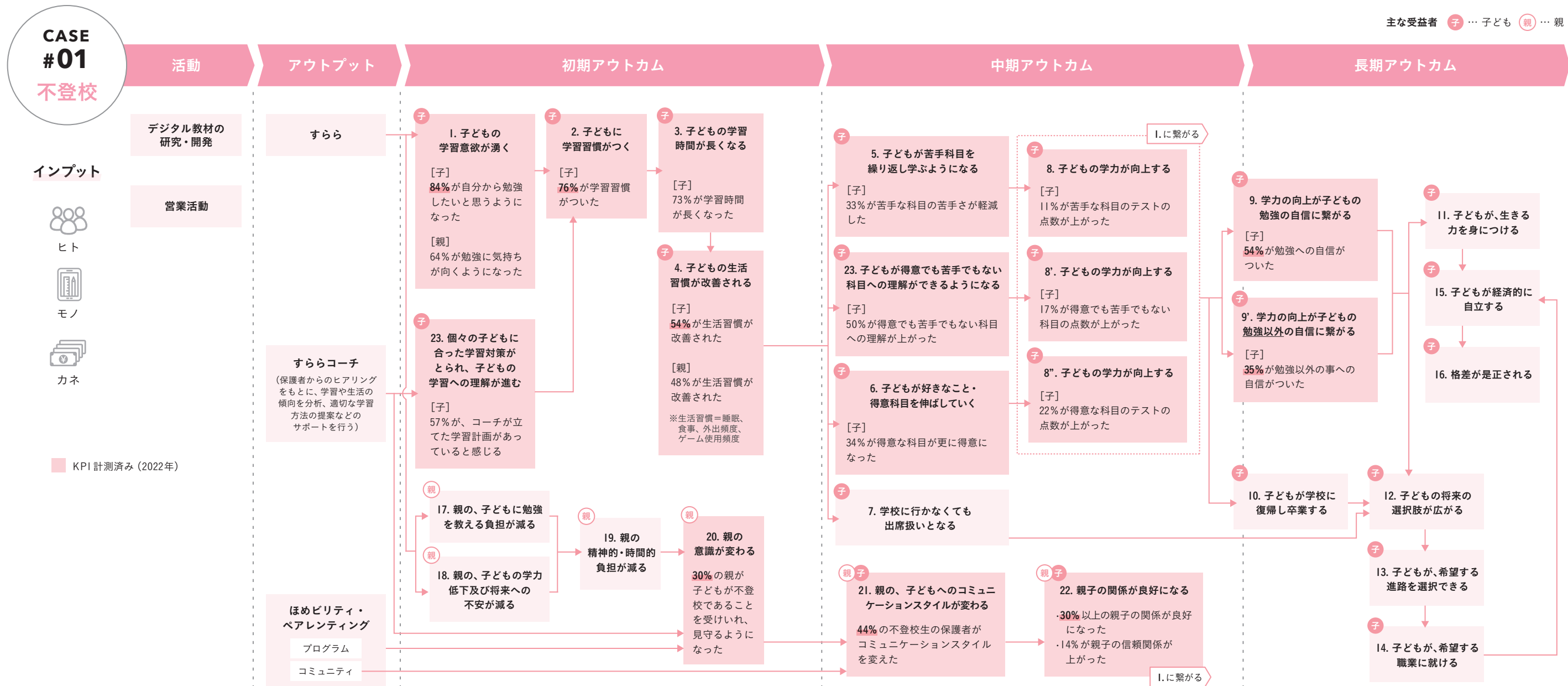
すららネットの取り組みとの関係

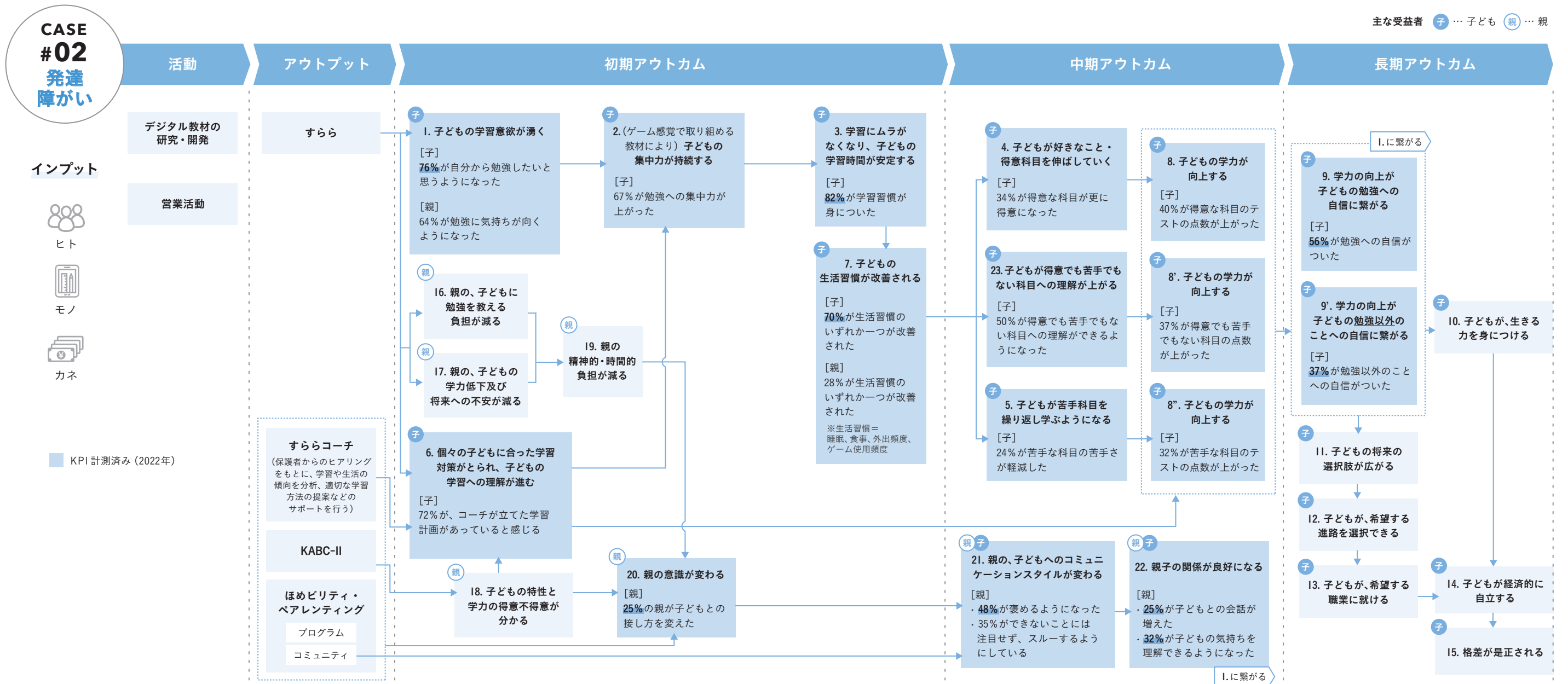
本課題マップを通じて、すららネットの事業活動が、社会課題の構造の中で特に「子どもの学習ストレスの増加」「子どもの学力低下」「子どもの自己肯定感の低下」に関わる負の連鎖に対し、インパクトを与えうることが明らかになりました。

これら3つの課題は、子どもの学習環境や将来に大きな影響を与える重要な因子であり、他の社会課題とも密接に関連しています。

すららネットは、AIを活用したアダプティブなICT教材「すらら」や、保護者支援プログラム「ほめビリティ・ペアレンティング」等の商品と、多様な教育現場における個別最適学習の実践コンサルティングなどを通じて、これらの課題に対して実効性あるソリューションを提供しています。







すららコーチ (保護者からのヒアリングをもとに、学習や生活の傾向を分析、適切な学習方法の提案などのサポートを行う)

KABC-II

ほめビリティ・ペアレンティング

プログラム

コミュニティ

発達障がいの子どもとその親へのインパクト

子ども	親
・自分から勉強したいと思うようになった ... 76%	・子どもとの接し方が変わった 25%
・学習習慣が身についた 82%	・ほめるようになった 48%
・生活習慣が改善された 70%	・会話が増えたり、
・勉強への自信がついた 56%	子どもの気持ちを理解できるようになった 25%以上
・勉強以外の事への自信がついた 37%	

発達障がいの子どもは、感覚過敏や集中のしづらさから学習環境の影響を受けやすい一方で、決まった流れで取り組む「ルーティーン化」が安心感や安定した学びにつながる場合もあります。アンケート結果からも、「すらら」を生活の一部として継続することで、無理なく学習習慣が身についたケースが見られました。「すらら」は、音に敏感な子どもにも配慮した耳にやさしい正誤音を採用し、WEB診断による認知特性の把握と、それに基づく個別最適な学習教材も提供しています。こうした特性に寄り添った教材が、学習への心理的ハードルを下げ、継続的な学びと成功体験の積み重ね、自信の回復へとつながっています。

受益者の声

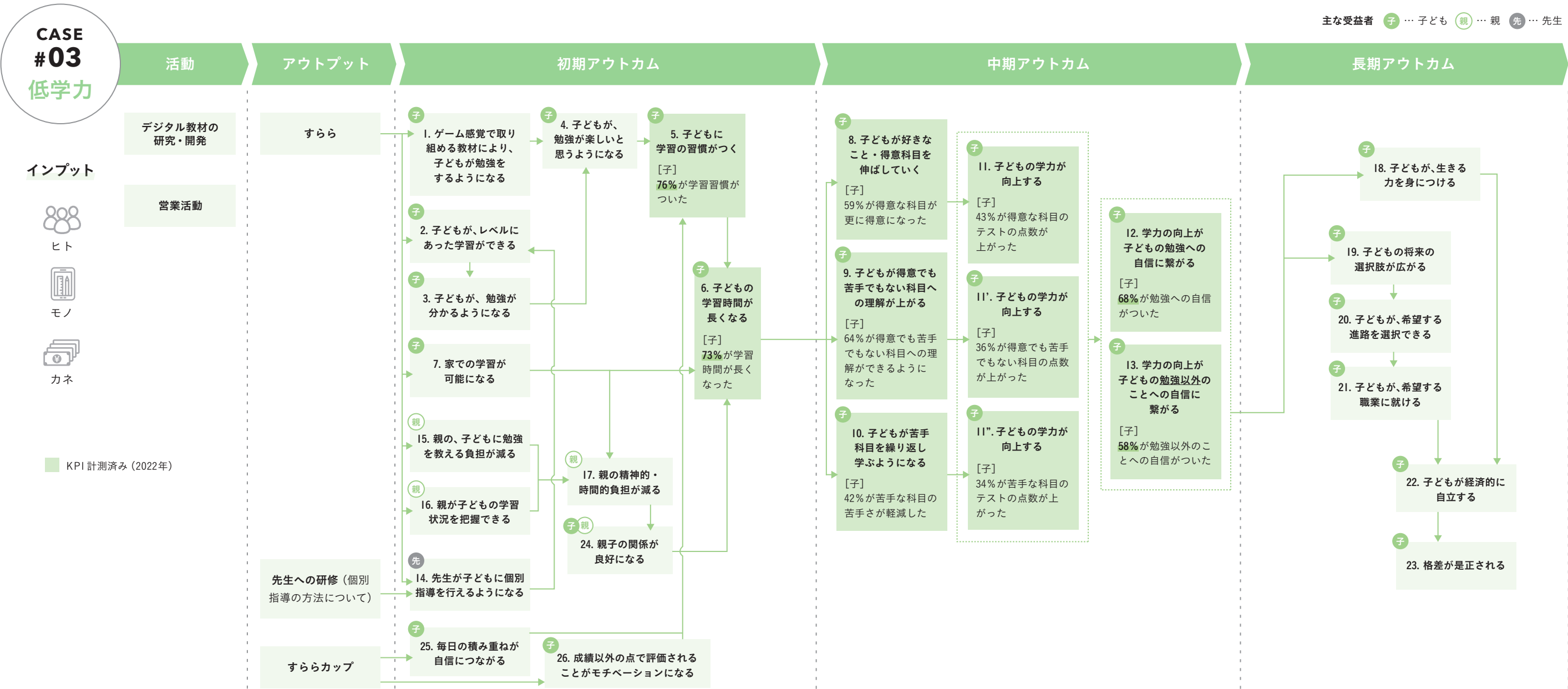
自分のペースで進められる安心感が、 学びへの意欲と自己肯定感を育んだ

..... お子様が小学生のY様

子どもは特性から集団での授業に難しさがあり、学校ではなかなか自分の力を発揮できずにいました。わからないことをそのままにしまったり、先生の説明が速すぎてついていけなかったりすることが続き、学ぶことに苦手意識を持ち始めていた頃、「すらら」に出会いました。

「すらら」は、アニメーション形式でわかりやすく、繰り返し何度でも自分のペースで学べるため、子どもにとっては「安心して学べる場所」になりました。「わかった!」という経験が増えていくことで、自信がつき、少しずつ「勉強が好き」と言えるようになってきました。親としても、「どうしてできないの?」ではなく、「ここまでできたね」と声をかけるようになり、子どもの表情が明るくなったと感じています。学校でも、「これならできるよ」と前向きな発言が増え、担任の先生からも「自分から手を挙げる場面が増えました」と言っていただきました。

学びの場を「自分の居場所」と感じられることが、子どもにとって何より大きな力になっています。今後も「すらら」を通して、学ぶ喜びを積み重ねていってほしいと思います。



低学力の子どもへのインパクト

子ども			
・学習習慣がついた	76%	・勉強への自信がついた	68%
・学習時間が長くなった	73%	・勉強以外の事への自信がついた	58%

「すらら」はデジタル端末を活用した学習ツールであるため、勉強が苦手な子どもにとっては、教科書を開くよりも画面を開いてログインする方が、学習へのハードルが低く感じられています。また、習熟度や進度に合わせて学習を進めることができ、学習時間や弱点を克服するために提示されるミッションの達成によってポイントがたまっていくので、自然に学習意欲を引き出し、継続できるような設計になっています。

アンケート結果では、低学力層に属する「すらら」の利用者は、他の利用者と比べて「勉強への自信がついた」と回答する割合が高くなっています。「やればできる」という自信を得た子どもたちは、勉強以外の場面でも意欲的に取り組むようになり、社会や自分の将来に対して前向きな姿勢を見せたり、関心を高めたりする様子も見られました。

受益者の声

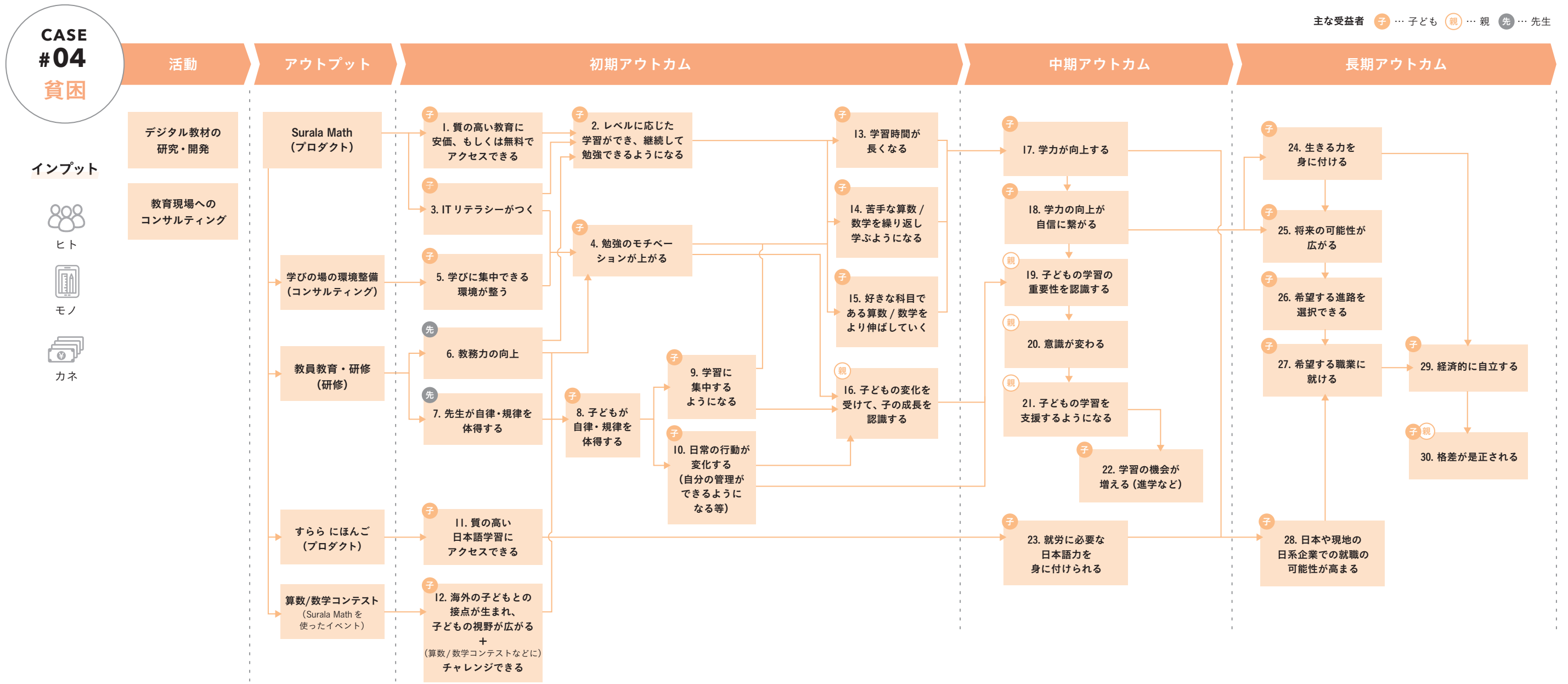
学習の遅れからくる自信のなさが、「できた！」の経験で変わっていった お子様が中学生の1様

中学に入ってから授業についていけず、自信をなくしていた子どもは、「自分ではできない」と思い込むようになっていました。そんな時に会ったのが「すらら」でした。自分のペースで、わかるところまでさかのぼって学べるので、「できた！」という感覚を少しずつ積み重ねていくことができました。最初は1日10分くらいの学習から始めましたが、徐々に学習時間も増えていき、学習習慣が定着していきました。

学力面では、英語の単語テストで初めて満点を取り、本人もとても嬉しそうでした。「できるかも」という気持ちが芽生えたことで、以前よりも前向きに学校生活に取り組めるようになったようです。私自身も、テスト結果に一喜一憂するのではなく、日々の頑張りを見守るようになり、親子の会話もポジティブなものが増えたと感じています。

「すらら」に出会っていなければ、きっと「わからない」ままにしていたことが多かったと思います。これからも少しずつ「できた！」の積み重ねを続けて、子どもの自信につなげていけたらと思います。

※本ページでは、すららネットの海外事業が対象としている、開発途上国での貧困課題の解決に向けた道筋を示すロジックモデルを紹介します。当社では、スリランカやインドネシア、エジプト、カンボジアなどで、様々な国際機関・政府機関・NGO・財団等と連携しながらデジタル教育を届ける活動をしています。従来の算数・数学教材に加え、2023年からは日本語教材も提供し、就労に向けた活動も広がっています。



海外の貧困の子どもへのインパクト ※2014年～2025年5月までの累計

開発途上国の利用者数

18,559名

すららネットの教材が導入されている国

6カ国

(インドネシア、スリランカ、インド、フィリピン、ミャンマー、カンボジア)

すららネットの教材が導入されているNGO、NPOの拠点数

56拠点

すららネットでは、学習教材の提供だけでなく、ICT教材を効果的に活用した均質な授業運営のための、現地の教員の育成も行っています。今後は、デジタル端末の提供も推進していくことで、貧困地域の子どもの学習支援を強化・拡大していきます。

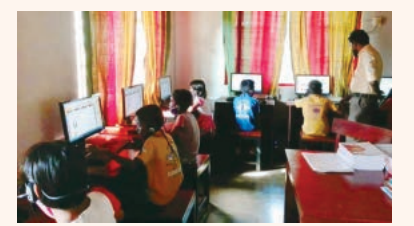
現地の様子

海外の NGO・NPO と連携し、学びの機会を提供
スリランカで広がる「Surala Math」—— 学ぶ喜びが子どもたちの自信と未来をひらく

スリランカでは、コロナ禍や経済危機で学びの機会を失った子どもたちを支援するため、NGO・NPO が「Surala Math」を導入。都市部に限らず、農村や北部の貧困地域にも広がり、算数の基礎力や学ぶ意欲の向上に役立っています。

また、すららネットが主催する「すららカップ」や「デジタル算数コンテスト」は、子どもたちにとって目標となり、成功体験を得る貴重な機会となっています。

国際 NGO「SOS 子どもの村」では、非認知能力の育成効果も評価され、今後は調査を通じた効果測定も予定されています。すららネットの教材は、海外の困難な状況にある子どもたちに、学びの選択肢と成功体験を届ける手段として、活用が広がりつつあります。



SOS 子どもの村の子どもたちが学習する様子

データで見た「すらら」の効果 — 学びと自信の好循環

詳細分析で分かった、“やる気→学力向上”のメカニズム

実施内容 全国の「すらら」家庭学習ユーザーを対象にアンケートを実施。「すらら」の学習による心理と行動の因果関係を構造方程式モデリング (SEM)^{※1}で分析しました。

- 主な結果**
- 「心理的安全性 (安心)」が「学習意欲」に強く影響
 - 「やる気」が「学力向上」へとつながる構造を確認
 - 子どもの「自信 (自己効力感)」が学力向上の実感に強く影響
 - 保護者からの具体的支援が及ぼす効果の構造を確認
 - 不登校や発達障がいの子どものほど、この流れが有効

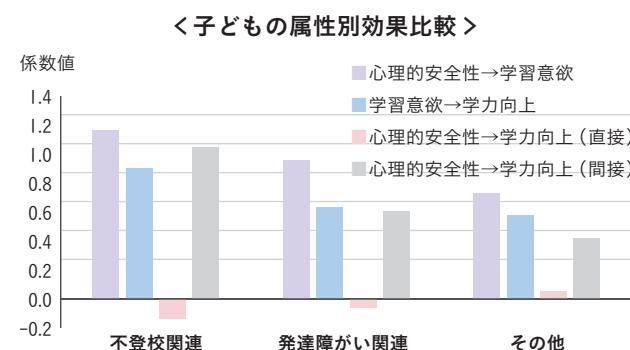
「すらら」が学びの成果を生む“流れ” — 心理と行動のつながり

心理的に安心できる環境が、「やってみよう」という気持ち (学習意欲) を引き出し、継続的な学習と成績向上につながります。この意欲の高まりは、「自信」や「学習習慣の定着」といった中間ステップを経て、進路形成や自立、さらには教育格差のは正といった長期的な成果へと波及しています。



01 ... 不登校・発達障がい・学力に悩む子どもたちは、「すらら」でどう変わった？

「安心できた」→「やる気が出た」→「勉強ができるようになった」と感じるまでの流れが、子どもの属性 (不登校 / 発達障がい / その他) によってどの程度機能しているかを比較した結果です。値が大きいほど、「安心→やる気→成果」のプロセスが効果的に機能していることを意味します。不登校や発達障がいの子どものとって、この流れが特に重要であることが示されました。一方、一般的な学習目的の子どもに対しては、達成目標など別のモチベーションとの組み合わせが効果的である可能性が示唆されます。



02 ... 小学生・中学生・高校生は、それぞれ「すらら」でどう変わった？

「安心→やる気→学力向上」の流れは、学年によって異なる傾向を見せます。

■ 小学生：素直に反応が表れる時期

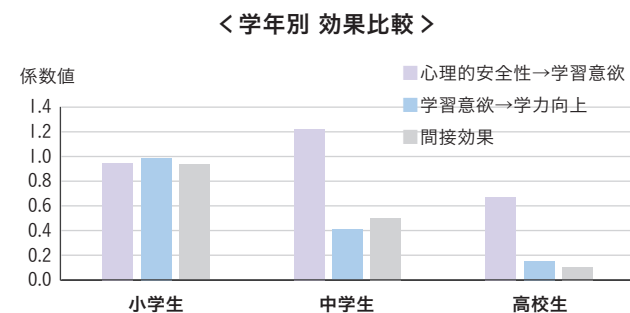
安心感がそのままやる気につながり、成果も出やすい傾向に

■ 中学生：揺れが生じやすい時期

安心すればやる気は出るものの、テストや部活などの影響で成果に結びつくまでに時間がかかることも

■ 高校生：別の要因が影響する時期^{※2}

安心感だけでは成果に直結せず、進路意識やプレッシャー、目標設定などがより大きく影響



※1 構造方程式モデリング (SEM : Structural Equation Modeling) ... 「子どもの自信が学力にどう影響しているか」など、複数の要素の関係性を図や数式で“見える化”する統計的な分析手法です。今回はアンケート結果のデータから、「どの要素が、どのくらい成果に影響しているか」を明らかにしました。

※2 高校生に関する結果は、回答数が少ない (11 名) ため、予備的な示唆にとどめます。

03 ... 子どもたちの“学びに向かう力”は、「すらら」でどう変わった？

■ 「自分でもできるかも」と思える体験が、学力向上の実感に直結

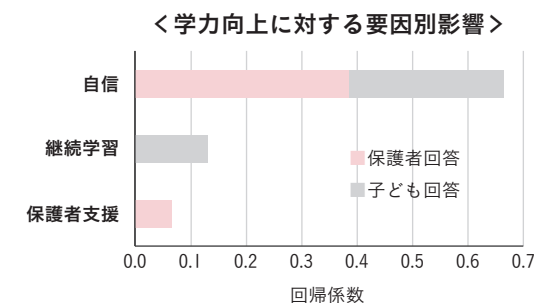
「最初は苦手だったけど、やってみたら意外とできた」→「もっとやろう」→「前よりできた！」という体験の積み重ねが重要であることが示唆されています。

■ 「続けられた」実感が、自信と成長実感を後押し

「毎日 10 分でも続けた」経験が、「頑張っている」という自信につながっているといえます。

■ 保護者の支援は、子どもが気づかなくても“見えない力”に

「具体的なアドバイスをした」保護者ほど、「子どもの学力が上がった」と感じています。中でも「ほめビリティ」プログラムによる親子関係の改善は、学習への前向きな姿勢と学力向上に好影響を与えていました。家庭内の信頼関係や情緒的つながりが、学習への前向きな姿勢を支える基盤のひとつとなっていることが示されました。



04 ... 子どもたちの“今の学び”は、「すらら」でどんな未来につながる？

「すらら」での学びが将来にどのように役立っているか (長期アウトカム)、3 つの視点から分析した結果、将来の可能性を多面的に促進していることがわかりました。

① 進路・職業形成

「将来の夢が見えてきた」「資格取得や進学に前向きになった」など、自己の可能性に気づき、自ら一歩を踏み出す力が育まれています。

② 生活力・自立性

「計画を立てて行動できるようになった」「小さな成功の積み重ねが自信に」というように、自律的な生活・学習態度が形成されています。

③ 格差是正

経済的困難、不登校、発達障がいなどの状況にある子どもたちに対しても、学習機会を保障し、「等しくチャンスを届ける」ことが「すらら」の大きな役割です。

分析から見えてきた支援のあり方

「すらら」の学習効果を最大限に引き出すには、教材に加え、安心して学べる環境や保護者・教員による具体的な支援が不可欠です。特に不登校や発達障がいの子どものとって、「安心できること」そのものが、学習意欲や成果への入口となります。子どもには、努力が成果につながるという実感が重要であり、そのためには成長の可視化や挑戦の後押し、目標設定の支援が効果的です。一方で、保護者が子どもの様子に気づきやすくなるようなサポートや、日々の関わり方を一緒に考えられるような支援が大切です。家庭内における安心できる学習環境の整備や、励まし・見守りによる関わりの促進が、子どもの継続的な学びを支える基盤となります。

ICT 教材『すらら』活用における学力・心理・社会的効果の構造的検証

調査概要

調査対象：『すらら』の家庭学習ユーザーの子どものと保護者 調査実施時期：2025 年 3 月
調査方法：オンラインアンケート形式による自記式質問票 ※保護者・子どもそれぞれに対して実施
回収サンプル数：子ども回答 ... 318 件 (うち一部分析では有効回答のみ抽出)、保護者回答 ... 479 件
主な分析手法：多変量回帰分析 (OLS)、単回帰分析、共分散構造分析、因子分析
調査・分析責任者：小松 正 (フィランソロピー・アドバイザーズ株式会社 データサイエンティスト)

＜調査・分析 / 監修＞ 小松 正 (フィランソロピー・アドバイザーズ株式会社 データサイエンティスト)

1967 年北海道生まれ。北海道大学大学院農学研究科農業生物学専攻修士後期課程修了。博士 (農学)。日本学術振興会特別研究員、言語交流研究所主任研究員を経て、2004 年に小松研究事務所を開設、独立系研究者として活動。2024 年よりフィランソロピー・アドバイザーズ株式会社所属。専門は生態学、進化生物学、データサイエンス。著書に『いじめは生存戦略だった!? ~ 進化生物学で読み解く生き物たちの不可解な行動の原理』『情報社会のソーシャルデザイン 情報社会学概論 II』『なぜヒトは心を病むようになったのか?』など。

特集

SPECIAL
FEATURE
#02

“学びの楽しさ”が力になる 自ら学び続ける力を育てる「すらら」独自イベント

すららネットでは、「すららカップ」と探究型イベント「すらら 探究チャレンジ※」を10年以上企画・運営しています。両イベントは、全国規模で展開されることで、教室や地域を超えて子どもたちがつながり、多様な価値観に触れる機会を生み出します。ロジックモデルにおける中間アウトカム（学習意欲・自信の向上）と最終アウトカム（学びの継続、社会的自立）に貢献する取り組みです。

努力が称賛される学びの祭典「すららカップ」

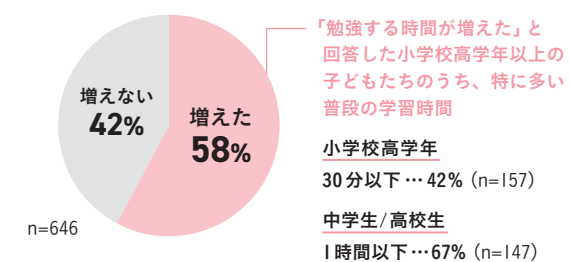
学年や居住地、国籍を問わず、世界中の子どもたちが学習の「努力量」で競い合うイベントです。偏差値やテストの点数ではなく、「総学習時間」や「実施ユニット数」などをもとに評価することで、学力に関わらずすべての子どもたちに挑戦の機会を提供しています。

学習が苦手な子どもたちでも、継続した努力や工夫が評価される仕組みによって、自分の可能性に気づき、自己効力感を育むことができます。これは、ロジックモデルにおける「学びに向かう意欲の喚起」ととまらず、「学習の継続」や「学力の向上」にも寄与しています。

≫ 家庭学習に取り組むきっかけに

第21回大会（2024年度）では、全国・海外の約25万人が対象となり、646名の参加者アンケートでは58%が「学習時間が増えた」と回答。特に、学年相当の家庭学習時間に満たなかった中高生の約6割、小学校高学年の約4割で学習時間の増加が見られました。イベントを通じて、目標設定・計画的学習といった「自己調整学習スキル」の育成が促され、学習習慣の定着につながることを示唆されました。

Q.すららカップに参加して 勉強する時間が増えましたか

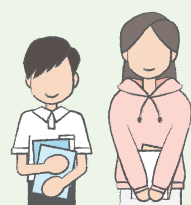


主体性と社会性を育む探究型イベント「すらら 探究チャレンジ」

すららネットが2015年から実施してきた探究型イベント「すらら アクティブ・ラーニング」は、2025年より「すらら 探究チャレンジ」としてリニューアル。このイベントの最大の価値は、「考えることの楽しさ」と「自分の意見を持ち、伝える力」が育つ経験にあります。参加したOBOGの中には、後に進路選択のきっかけとして本イベントを挙げるケースも少なくありません。

すらら 探究チャレンジ OBOGの声

誰かに正解を教えてもらうのではなく、自分で仮説を立て、試行錯誤し、他者と意見を交わしながら一つの考えにたどり着く経験は、大学での研究活動や就職活動にも直結していると感じています。



すららネットの探究型イベントは、仲間と議論する中で自分の弱点に気づき、それを乗り越える成長のきっかけになりました。そこからさらに自信や将来の目標につながっています。

※ 旧「すらら アクティブ・ラーニング」

特集

SPECIAL
FEATURE
#03

学べる場所をすべての子どもに 全国の学校・支援現場で広がる「すらら」活用事例

「すらら」を活用した個別最適な学びは、ロジックモデルにおける初期アウトカム（安心できる環境の提供）から中間アウトカム（学習意欲の喚起・学習習慣の定着）、そして最終アウトカム（基礎学力の向上・将来への希望）に至るまで、一人ひとりの状況に応じた成長を支えています。

不登校生の学習支援の広がり

2023年度、小中学生の不登校は34万人を超え、過去最高を更新しました。すららネットは、不登校の子どもたちの学びを支えるため、家庭学習のほかにも全国の自治体・教育機関・民間団体と連携しながら多角的な支援を展開しています。

≫ 自治体の不登校支援での「すらら」利用者数が6年で約12倍

不登校児童生徒数の増加とともに、自治体での「すらら」導入も増加し続けています。2024年には、政令指定都市の横浜市での導入も始まり、2019年から6年間で自治体の不登校生利用者数が約12倍になっています※1。

≫ 全国初のフリースクール認証制度で「すらら」導入校が認証

長野県では、全国初のフリースクール認証制度「信州型フリースクール」を2024年4月に創設しました。「すらら」を導入しているフリースクール未来（長野市）は、第1期分で認証されました。

※1 2024年12月末時点

発達に特性のある子どもたちの「学びたい」を支える

「すらら」は、2018年から放課後等デイサービスでの導入が始まり、現在216施設で活用されています※2。発達障がいや知的障がいのある子どもたちの成長や自立に大きく関わる放課後の時間を、「すらら」の活用を通じて支えています。

≫ 「すらら」が育む自信と学びの好循環

神奈川県「ハッピーテラス溝の口教室」では、自宅学習支援の一環として「すらら」を保護者に紹介し希望者が利用しています。ASDと軽度知的障がいのある小学3年生のIさんは、集団活動が苦手ながら「すらら」で学ぶ楽しさを実感し、「中学生の社会をやってるんだ！」と自信を持って学習に取り組んでいます。また、すららカップでの入賞は教室内の励みとなり、家庭学習の定着や子どもの成長を保護者も実感。家庭・教室・子どもをつなぐ好循環が生まれています。



※2 2024年12月末時点

高校生の進路につながる学びを支える

「勉強が苦手」の背景には生徒一人ひとりの異なる経験や事情があります。学力の差だけでなく、目指す進路や学習への向き合い方も多様です。「すらら」は、そうした高校生それぞれの歩みに寄り添い、自信を取り戻しながら学び直せる環境を整えることで、卒業後の進学・就職など多様な進路選択につながる学びの機会を提供しています。

≫ 個別最適な学びが生徒に前向きな変化を生む

埼玉県立幸手桜高校では、大学進学を目指す生徒や基礎からの学び直しが必要な生徒など、多様な生徒に対応するため、小学校から高校範囲まで幅広く学べる点を評価し、「すらら」を導入しました。タブレットを使った個別最適な学習は、全ての生徒が自分のペースで学べる環境を支えています。学習への心理的ハードルを下げることで、潜在的な力を持つ生徒が学習習慣を身につけ、前向きに取り組む姿が見られるようになっています。



多様なニーズに応え、進化する学びのソリューション

すららネットは、子ども一人ひとりの学びの多様性に向き合い、基礎学力の定着から探究学習、さらには外国人の日本語学習や保護者支援まで、幅広い領域で商品・サービスを展開しています。これらは、私たちのロジックモデルにおける「学力形成」「非認知能力の育成」「保護者や学習環境の支援」など、社会的インパクトにつながる複数の因子に作用しながら、教育の変革を推し進めています。



すらら

基礎学力 × 教員の業務軽減

無学年式の ICT 教材「すらら」は、生徒一人ひとりの理解度に応じた学びを提供することで、基礎学力の定着を支援します。公立小中学校向けにはドリルとテストに特化し、宿題や授業との連動を通じて日常的な学びを支えることで、教員の業務軽減にも貢献しています。これらはロジックモデルにおける「学力形成」「教育格差の是正」「学習継続の促進」に影響を与えています。



すらら漢字アドベンチャー+
認知特性 Web 簡易診断

認知特性に応じた個別最適な学び

視覚・聴覚などの認知特性に応じた「すらら漢字アドベンチャー」は、個別最適な方法で漢字学習を可能にする ICT 教材です。認知特性 Web 簡易診断とあわせて提供することで、学び方の特性に気づき、自分に合った学習方法を見つける支援を行います。これらは、「学習意欲の向上」や「個別最適化された学び」の実現に寄与します。



Surala Math

海外向け算数・数学教育 × 個別最適な ICT 学習

「Surala Math」は、海外の初等・中等教育向けの算数・数学 ICT 教材です。四則計算をアニメーションで楽しく学べる「Surala Ninja!」と、「すらら」の算数・数学コンテンツを各国の教育状況に合わせて最適化（ローカライズ）した学習コンテンツで構成されています。現在、インドネシア語版・英語版・シンハラ語版（スリランカ）を展開しており、2025 年にはクメール語版（カンボジア）のリリースを予定しています。一人ひとりに最適な学びを提供し、学習習慣の定着を支援することで、基礎学力の向上だけでなく、自信や主体性といった将来の「生きる力」にもつながるアウトカムの実現を目指しています。



すらら にほんご

外国人の就労支援 × 日本語学習

「すらら にほんご」は、国内外の外国にルーツを持つ人たちが、就労・留学・生活に必要なレベルの日本語を楽しみながら習得できる ICT 教材です。実践的な表現に加え、文化理解や生活上の場面を想定した教材設計になっています。これはロジックモデルにおける「社会的包摂」「就労支援」といった観点から社会的インパクトを生み出しています。



ほめビリティ・
ペアレンティング

保護者との連携・家庭環境の支援

子どもとの関わり方に悩む保護者を対象に、科学的なアプローチで、人との関わりに好循環をもたらすほめる力＝「ほめビリティ」を高める支援プログラムです。家庭での声かけが変わることで、心理的安全性をもたらし、子どもの自己肯定感や学習意欲の向上にもつながります。

About us

教育に**変革**を、子どもたちに**生きる力**を。

株式会社すららネットは、AIなどの先端技術を活用し、「わかる」「できる」「勉強が楽しい」と実感できる次世代の学びを提供する EdTech 企業です。

2005 年に開発を始めた対話型 ICT 教材「すらら」は、アニメーションキャラクターによる親しみやすいレクチャーと、AI によるつまづき単元への自動出題を組み合わせた個別最適な学習教材です。小学生から高校生までの英語・国語・算数／数学・理科・社会・情報に対応し、ゲーミフィケーションの仕組みで学習意欲も高めます。一人ひとりの理解度や進度、発達特性などに応じて柔軟に学べるアダプティブな学習教材で、学習のあり方そのものをアップデートし続けています。

現在、当社の教材は国内外の学校や学習塾、フリースクールなど 2,600 以上の教育機関に導入され、約 25 万人以上が利用しています。特に、不登校や学習困難を抱える子どもたちへの支援に力を入れており、教育委員会や自治体の先進的な取り組みにも多数採用されています。

すららネットはこれからも、テクノロジーで教育を変革し、すべての子どもたちが自分らしく学び、成長できる社会の実現を目指してまいります。

会 社 名
株式会社すららネット（英文名 SuRaLa Net Co., Ltd.）

設 立 日
2008 年 8 月 29 日

所 在 地
東京都千代田区内神田 1 丁目 14 番 10 号 PMO 内神田

資 本 金
2 億 8,377 万 7 千円

事業内容
e-ラーニングによる教育サービスの提供および運用コンサルティング、マーケティングプロモーション及びホームページの運営

Website
<https://surala.co.jp>

Our Mission

教育に変革を、子どもたちに生きる力を。

世の中には、学力や所得、地域の格差などによって十分な教育を受けることができない子どもたちがいます。私たちはそうした子どもたちにも、ひとりひとりに合った新しい学習体験を届けます。

この学習体験を通じて、子どもたちは、「大人になっても役に立つ真の学力」と「努力をすれば結果が出るという自信」を身につけることができます。

私たちはこれらを実現するために、
新しい学びの形を、学校や塾、その他の教育機関と共に築いていきます。

株式会社すらネット

東京都千代田区内神田1丁目14番10号 PMO 内神田7階

<https://surala.co.jp>